

令和元年6月19日現在

機関番号：34601

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K13490

研究課題名（和文）「挑戦できない」大学生への支援モデルの開発：大学に備わる発達促進機能の活性化

研究課題名（英文）Development of a support model for "can't challenge" university students:
Activation of development promotion function provided in university

研究代表者

森田 健一（MORITA, Kenichi）

帝塚山大学・心理学部・准教授

研究者番号：50634888

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：現代の高等教育では、社会人基礎力として必要な資質である主体性を醸成するためアクティブ・ラーニング等の学生参加型学習方法が推奨されており、その成果や効用については様々に論じられているが、実際のところそこで生じる困難さについては十分検討されているとは言い難い。本研究では特に、学生のみならず教職員自身の傷つき、オモテには出てこないありふれた工夫など、現場での実態を明らかにすることで今後の高等教育で必要な視点について明確にした。学生の個別ニーズの心理学的見立て、関わる際の教職員自身に生じるネガティブな感情を吟味する意義、居場所を提供する際の工夫などが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

市場原理が色濃く支配する現代において、「主体性のない現代の若者」の問題が叫ばれる中で、社会人基礎力の醸成を視野に入れた様々な学修方法が高等教育で期待されている。一方、その流れに乗ることのできない学生の傷つき、また彼らを支援する教職員の運営上の苦悩が語られることは少ない。学生中心の大学教育、合理的配慮、ダイバーシティの支援、等の現代的特徴を考慮すると、「個の支援（理解）」の重要性が際立ってくる。これは、従来心理臨床の分野で慎重に担われてきたその機能を大学が担うことを意味しており、本研究でその難しさと「重さ」、そして必要な視点について明らかにした。

研究成果の概要（英文）：In today's higher education, student participation type learning methods such as active learning are recommended in order to foster "subjectivity", which is a necessary qualification for basic skills for working people, and various results and effects are obtained. It is argued, but it is difficult to say that the difficulties that arise there are in fact considered. In particular, we clarified the viewpoints necessary for future higher education by clarifying the actual situation in the field, regarding the wounds that not only the students but also the teachers and staff themselves suffered, and the common ideas that do not come out to the front. It was suggested that the psychological assessment of the individual needs of the students, the significance of examining negative emotions that occur to the staff themselves when involved, and the points to be noted in supporting the place where students belong.

研究分野：臨床心理学

キーワード：高等教育 学生相談 居場所支援 アクティブ・ラーニング

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

大学全入時代とも言われる現代、強い動機付けに基づいて進学する学生ばかりとは限らず、「なんとなく」「周囲に流れられて」大学へと入学する学生も少なくない。それは特に、「受験戦争」と呼ばれるような挑戦に勝ち抜いた経験が乏しいいわゆる低偏差値大学の現場では顕著な問題である。そういった学生は、理想的な新卒者像として企業アンケート結果など上位を占める、コミュニケーション能力に長けたアクティブな学生像(岩崎ら,2012)とは程遠い場合が多く、その背景には単に学力の問題ではなく、「自己愛」の傷つきへの過剰な恐れによる受動性、つまり「挑戦できなさ」が大きな要因を占めることがわかっている(東畑,2011)。そういった学生への支援について、従来は学生相談の専門的枠組で研究が進められてきた。研究代表者も、ピア・サポート制度を用いた取組(上西ら,2014)や地域通貨を用いた相互扶助システムである「タイムダラー」を大学に導入する取組(森田ら,2012)など行っており、その中で「小さな成功体験」あるいは失敗を経た後の「小さな受容体験」の積み重ねこそが、自己肯定感の底上げに繋がる鍵であり、社会に求められる学士像へ至るための課題であるなどと考察してきた。しかしそれを実行するためには、限られた少数の専門家のみ委ねるのではなく、大多数を占める非専門家である教職員も実行可能な方法を検討する必要がある。従来から、学生相談の持つ課題として、「少数のみへの限定的な支援」であること、そして「支援が必要な学生が必ずしも専門家に頼らないこと」などが挙げられているが、全学的な支援モデルを提唱することによって、そういった学生相談モデルの限界を補うことが可能となる。

2. 研究の目的

(1) 現代の高等教育現場で生じている問題の明確化：実際に現場でどのような問題が生じているかを明らかにする必要がある。現代の高等教育に求められていることを改めて整理し、現場で生じている様々な問題を明確化する。

(2) 専門家によらない全学的な支援モデルの提唱：上述の通り、高等教育機関における従来の支援モデルは学生相談のパラダイムで語られることが多く、その支援には様々な点で限界がある。「学生中心の大学教育(文部省高等教育局, 2000)」を成し遂げるためには、必ずしも専門家によらない全学的な支援モデルを提唱する必要がある。

3. 研究の方法

- (1) 現代における高等教育をめぐる状況に関する調査研究
- (2) 具体的な先進的取組に関する調査研究
- (3) 現代的高等教育手法に関するアクションリサーチ
- (4) 教職員の関わりの評価

4. 研究成果

以下、トピックごとにまとめて報告する。

(1) 現代の高等教育で求められていること：専門分野の知の修得のみならず、「社会人基礎力」をはじめとしたキャリア教育、自主的活動支援が重視されている。また、学生中心の大学教育というスローガンをもとに、「サービス機能」の充実がうたわれている。そこで教員は、学問の専門領域におけるプロフェSSIONALというだけでなく、学生の生きる能力そのものに関する指導者としても期待されており、当然支援者としての機能も担わねばならない。そのとき、社会人基礎力のさらに土台となる「生きる」ということを視野に入れた視点で関わらなければならないことも多く、教職員が連携しながら、多様性や種々の障害、個々の人生上の課題についてもふまえた心理的・生活的支援が必然的に求められることとなることが示唆された。

(2) 現場で生じる傷つき

学生の傷つき：多くの大学生は専門分野の学びと社会人基礎力に関する研修、さらにアルバイトやクラブ・サークル活動などの課外活動をバランスよく行っているが、一部の学生は十分にそれらを満喫することが出来ず、時に学生生活全体において不適応状態に陥っている。中でも、アクティブ・ラーニング形式の積極的参加型授業においては、前者の学生は有意義な学び・社会人となるうえで必要なこととして体験しているが、後者においては不完全燃焼感や場合によっては後に影響を与える傷を追うことになること傾向があることが本研究中の質問紙調査でわかった。その調査では、41.5%の学生が何らかの苦痛を感じており、32.3%の学生が過去に何らかの心の傷を負ったとの回答があった。また、グループ内でのそれぞれの参加熱意やコミュニケーション能力等でのズレから、従来意欲的であった学生に戸惑いや意欲の低下が生じていることも報告された。

教職員の傷つき：本来の専門業務を超えた関わりが求められている現代の高等教育において、無力感やときに怒りの感情などを抱くことがあることが、本研究中のインタビュー調査によってわかった。また、学生に寄り添った支援を試みた結果拒絶されたり、逆に時間を問わず重い相談を投げかけられたりするなど、学生との距離の取り方に困惑していることも少なくない。なお、アクティブ・ラーニング形式の授業では、参加意欲の低い学生に対する関わり方へ

の戸惑いも多く報告された。なかには、「一生懸命やったら嫌われるから適当にするしかない」、「教育機関というよりはケア施設のつもりで関わっている」等の半ば諦めに近い苦悩を込めた意見も見られた。

(3) 現代高等教育における様々な工夫

大学全体で行える工夫(国内外調査より主なもの): 海外のある大学では、学生相談機関を全学的なネットワークとして機能させることで、要支援学生を入学当初からサポートする取り組みがあった。入学時に心理検査を全学生に受けさせてスクリーニングし、要支援レベルの学生には相談を推奨していた。このとき、学生相談室のマンパワーの問題を補うために、訓練を受けた学生に運営を協力させる、無料で相談回数を制限し、規定回数を超えた場合には地域の専門機関へつなぐ等のシステムができあがっていた。学生相談室には様々な専門領域のカウンセラーが配置され、学生のニーズに合わせた支援を行っていた。ここから得られた知見は、学生相談ネットワークの拡大、すなわち学生や地域も巻き込んだ形での大きな枠組みで学生相談を運営するということの意義である。国内のある大学では、全学的な取り組みとして、地域と連携した様々なプロジェクトを運営していた。その際、中心となる部署を独立させ、いつでも学生の相談を受け付けることができる配慮を行っていた。近年、大学COC事業をはじめとした補助もあり、多くの大学で産学連携のプロジェクトを行っているが、多くの場合事務組織は他の業務との兼務である中で、独立した関わりを行うことでよりきめ細やかな指導・支援が可能となることが示唆された。

プロジェクトベーストレーニングにおける工夫(ゼミ運営) 東畑ら(2017)で報告・分析したように、ゼミ運営においては実は個々の学生のパーソナリティの未熟さや偏りが如実に表れる。特にプロジェクトベーストレーニングを導入して、チームでプロジェクト運営を行うときには、そこに人間関係が濃厚に展開されることによって、傷つきが生じやすく、ときに病理化しやすい。そして何より、そこには学生同士の困難な関係が生じ、さらには教員と学生との間にも難しい関係性が生じる。したがって、教員がそのような困難な関係性がいかなるものであり、それがその後いかように展開していくかを理解しておくことは重要であり、その上で教員が精神分析で言うところのコンテイン機能を果たすことが不可欠となってくる。臨床心理学は関係性を生きることと、その関係性を理解しておくことが折り重なっていることを明らかにしてきたわけで(東畑,2017)、そこから得られるコンサルテーション機能、スーパー・ビジョン機能は一般教員にとっても資するものであることが示唆された。

プロジェクトベーストレーニングにおける工夫(課外活動) 課外活動に参加する時点である程度の主体性は前提となるが、それでもなお消極的な関わりや意欲の低さなどが問題となることは少なくない。自らの意思で参加したにも関わらず、「生徒化する大学生」という言葉に象徴されるように、受動的にその場に居合わせるだけ、場合によってはいわゆる幽霊部員化する学生も現場では問題となり、アクティブ・ラーニングに関して述べたようなメンバー間の確執が問題となる。そのとき、彼らの抱える葛藤から目を背けさせず、「安全に」衝突する場をいつらえることが重要である。心理療法においてカウンセラーとの関係悪化を話題にすることがそのプロセスの進展につながることもあるように(森田,2016)、それは彼らの成長へと大きな役割を担うことになる。その際、顧問(あるいは責任者となる教職員)は自らをその場に投じ、葛藤の中に巻き込まれることが、彼らの安全感を確保し、また知的ではなく身体性を伴った感覚として葛藤を扱う上でも重要であることが示唆された。

(4) まとめ:現代の高等教育で必要なこと

時代を見据えること:多くの大学教職員は自らの学生時代をそのモデルの原型として大学教育に参入している。しかし、時代は刻々と変化し、従来の常識は現代の非常識となることが多々あり、それを知的には理解できていても腑に落ちる形で自らの教育活動に昇華できているとは限らない。現代の高等教育で何が必要でどのような関わりが求められているのかを全教職員が把握するところから学生支援が始まり、困難な状況を打開する大きな契機となるということが、本研究の事例研究やインタビュー調査によって明らかになった。

学生のニーズを理解すること:様々な事情を抱えた学生を支援する際、時代に求められていることを前提としつつも、個々の学生に寄り添った形で支援を実現しなければならない。その際、一方的な押し付けにはならず各々の人生そのもの(これまでの半生、これからの道のりを含め)を理解して上で関わる必要がある。特に、「大学全入」と呼ばれるような時代であるため、非積極的な形で大学に進学した学生は、自らの生き方に関する問いを後回しにしてきた場合が多々見られる。学修力や昨今重視されている社会人基礎力の前提となる、生きる力の醸成を行うことが現代では求められており、そのためには個々の人生に寄り添う形での支援が必要となる。いわゆるカウンセリング・マインド(桑原,1999)を全教職員が身につけることが現代の高等教育で必要となることが示唆された。

教職員自身の感情を自覚すること:カウンセリング・マインドをもって個々の人生に寄り

添うとき、支援者である教職員は必然的に心理療法家の側面を担うこととなる。当然、専門的訓練を受けてきたわけではないため高度に専門的な支援はできないものの、「学生中心」の大学教育をうたう以上、学生が個々に投げ込んでくる悩みを引き受けるにはその自覚がなければならない。そこで、従来心理療法の領域で積み重ねてきた視点を日常的な支援に役立てることが必要となる。現場で特に問題になっているのは、教職員が抱える戸惑いや負の感情である。そこから目を背けずに、学生理解のために自身の感情を精査したり、それを積極的に支援に生かしたりすることが、学生に寄り添う支援においては重要なこととなることが本研究の事例研究やインタビュー調査によって示唆された。

大学で「居る」ことを支援する：学習意欲や学習効率、学習成果など、教育学ではその支援と測定をめぐって多くの議論がなされているが、実はその前提として学生が大学に「居る」ことが必要である。具体的には、長期欠席や休退学の問題であり、それは実は担任制度が普及している現在、一般の学科教員の多くの時間を占めているものである。東畑(2019)ではこの「居る」の問題について、精神科デイケアを例にして論じたが、それは無論現代大学における「居る」を考える中で深められたアイデアである。その時に重要なのは「依存」の問題である。休退学の学生は基本的に不信感が強くなってしまい、大学コミュニティ内で依存が不可能になってしまう。これは実は現代大学が「主体性」「自立」を強調してきたことの裏面と言ってもよい。したがって、大学における「居る」を支援するために、大学内での日常を支えるケアや依存を可能にするコミュニティ設計が必要であることが本研究の事例研究で示唆された。

教職員のピア・サポート 心理療法家にとってスーパー・ビジョンが必須であるように、現場の教職員が学生を全人的にサポートするときには、彼ら自身を支える資源が必要となる。精神疾患等の困難な事情を抱える学生と関わる際には、学生相談カウンセラーをはじめとする専門家のコンサルテーションを受ける必要があるのは言うまでもないが、アクティブ・ラーニング形式の授業運営、日常的なゼミ運営や個別支援等の様々な局面で、教職員には困難が生じている。この困難さはダイバーシティ(多様性、そして個別性)を尊重する流れにある時代とともにますます大きくなることが予想される。心理療法の基本が話を聞くことであるように(東山, 2000)、教職員同士のピア・サポートはまずは困難な状況を共有するだけでも大きな意味を持つ。FD・SD研修会では、新しい制度や授業運営の勉強や教育力・支援力の向上を目指して行われることが多いが、ただ状況を共有するというだけの場を設定することの意義が本研究の事例研究やインタビュー調査で示唆された。

<引用文献>

- 東山紘久、創元社、プロカウンセラーの聞く技術、2000年
岩崎暁、西久保日出夫、大学新卒者採用における「求める人材像」の業種別傾向に関する研究：企業ウェブサイトの発信メッセージ分析を通して、コミュニケーション科学、35号、2012年、179-207
上西創、森田健一、ピア・サポーター宿泊研修における取組：構成的グループエンカウンターを用いた試み、東北工業大学紀要 人文社会科学編、34号、2014年、11-24
桑原知子、日本評論社、教室で生かすカウンセリング・マインド：教師の立場でできるカウンセリングとは、1999年
東畑開人、森田健一・加藤亮介、内面に介入する現代高等教育に生じる困難について、学生相談研究、38巻、2017年、109-120
東畑開人、誠信書房、日本のありふれた心理療法家：ローカルな日常臨床のための心理学と医療人類学、2017年
東畑開人、自己愛的に考えられた「自己愛」、心理臨床学研究、29(3)、2011年、305-316
文部省高等教育局、大学における学生生活の充実方策について：学生の立場に立った大学作りをめざして(報告)、2000年
森田健一、学生相談における終結についての一考察：学生から大人の世界への架け橋の時期に為される期限付きの心理療法、松木邦裕監修 心理療法の終わり：終結、中断等をめぐる論考 京大心理臨床シリーズ第11巻、2016年、pp.113-127
森田健一、上西創、タイムダラーを導入した直接的コミュニケーション能力醸成の取り組み、工学教育、60(1)、2012年、106-111

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計10件)

- 東畑開人、心理療法家にとっての人類学：もたらされるものと失われるもの ナラティブとケア(査読無) 10巻 2019年 46-54.
東畑開人、森田健一、加藤亮介、内面に介入する現代高等教育に生じる困難について 学生相談研究(査読有) 38巻 2017年 109-120.

[学会発表](計3件)

- 森田健一、東畑開人、加藤亮介、主体的行動を促すための支援のあり方：学生に挑戦させ

るための支援者の挑戦 日本学生相談学会 2017 年
東畑開人、森田健一、加藤亮介 一般教員による学生への逆転移：プロジェクトベースラーニングの経験から 日本学生相談学会 2017 年
加藤亮介、東畑開人、森田健一 アクティブラーニングにおける心の支援：新たな枠組みの必然性 日本学生相談学会 2017 年
〔図書〕(計 2 件)
東畑開人 医学書院 居るのはつらいよ：ケアとセラピーについての覚書 2019 年 347 ページ
東畑開人 誠信書房 日本のありふれた心理療法家：ローカルな日常臨床のための心理学と医療人類学 2017 年 323 ページ

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：東畑 開人

ローマ字氏名：TOWHATA Kaito

所属研究機関名：十文字学園女子大学

部局名：人間生活学部

職名：講師

研究者番号 (8 桁): 30747506

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。